

# 魔斬りの剣

川崎ゆきお

夜中の一時だった。チャイムがなった。この期間なら人はいない。家族の誰かが死んだのだろうか。それなら電話があるはずだ。

私は夜更かしなので、まだまだ起きている時間だが、他の家なら迷惑な訪問だろう。

玄関を開けると、老人が立っていた。

「森田です」

「はあ」

数件先に同級生の森田の家がある。そこの隠居さんだが、普段からの付き合いはない。

「これを忘れちゃ駄目でしょ」

森田老人は小さな刀を差し出した。

見覚えはない。

「魔獣を倒すための勇者のロングソードだよ。魔斬りの剣だよ。せっかく手に入れたのに、あんた捨うの忘れて去ってしまうんだから...今頃探してるんじゃないかと心配してね、届けに来たわけですよ」

私は、森田老人が何を言っているのか分からなかったが、言わんとすることは理解できた。

「わしは、もう寝るが、明日またオセローの洞窟でお会いしましょう」

翌日私は森田老人を訪ねた。

「お爺ちゃんはお休み中なんですけど。何かご用ですか」森田の嫁は結婚したころの面影はなく、ただのおばさんだ。

「これなんですがね？」

私はペーパーナイフを見せた。

「何ですか？ これ」

「心当たり、ありませんか？」

「新ちゃん、ちょっと」

嫁は中学生の息子を呼んだ。

「ここじゃ何ですから、上がってください」

森田の家に上がるのは、小学校のころ以来だった。

新一はペーパーナイフを知っていた。ゲームの付録で魔斬りの剣だとはっきり言った。

「お爺ちゃんもゲームするの？」

「ああ」

「このゲームのマニュアルはない？」

「爺ちゃんに渡した」

私は、ゲーム内容を聞いた。

勇者が魔獣を倒し、帝都を解放するというありふれたものだった。

「あのう、お爺ちゃんが、何か？」

「独自の世界に入っているようですね」

「爺ちゃんは魔導師さ」新一がニヤリと言う。

「何かご迷惑でも...」

「早く帝都を解放することです」

「はあ...」

嫁は新一の顔を見た。

了